

---

## 御隣地蔵の由来

連連

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

御隣地蔵の由来

### 【Nコード】

N3533E

### 【作者名】

連連

### 【あらすじ】

この御隣地蔵の名前にはちゃんとした由来があるそう。元々、この地蔵のあった場所には村があったが、さしたる名もなく周囲からは隣村と呼ばれていた。隣村の跡に立っているから御隣地蔵なんて安易だと笑ってはいけない。笑えば、竜に崇められると言われている。では何故そういう名前がついたのか、山上村に伝わる伝承を紐解いてみよう。

**（前書き）**

表現が下手なのは勘弁してください。上手くなるよう努力しますの  
で…。

この御隣地蔵の名前にはちゃんとした由来があるそう。

元々、この地蔵のあった場所には村があったが、さしたる名もなく周囲からは隣村と呼ばれていた。

隣村の跡に立っているから御隣地蔵なんて安易だと笑ってはいけない。笑えば、竜に崇められると言われている。

では何故そういう名前がついたのか、山上村に伝わる伝承を紐解いてみよう。

ドーン、ドーン……。

また聞こえる。忌々しい音だ。俺のととかかを奪った憎らしいあいつだ。

今は遠くの山で暴れてるみたいだが、最近続く雨でこちら側にも近づいているはずだ。

このままだと隣村の奴らはきっと食い殺されるだろうな。

俺が何とかしないと。

次郎は壁に立てかけられていた一丁の猟銃を片手に、部屋を飛び出した。

夜とはいえ、雨が降っていて辺りは闇い。

村を走り抜けている途中で、隣村の兼吉に出会った。何だか酷く慌てた様子で、まるで何かに襲われたように錯乱している。

「兼吉、おまえ兼吉じゃねえか」

次郎の声を聞いて、兼吉は素っ頓狂な声をあげた後、転びながら次郎の前まで這ってきた。

「わ、若旦那！大変だ！出たんだよ、出たんだあいつが」

あいつという言葉聞いて、次郎は激しく歯ぎしりをした。

「あいわかった。みなまで言っな。おまえがここにいてことは、

他の奴らはどうした？」

「わかんね、おら、わかんねよ。あいつの鳴き声さ聞こえたら、突然轟音が響いて……。あれは山の神が怒ってんだ。おらたちが山の木さ伐採してつから。きつと祟りだ」

「落ち着け、兼吉。すゑは！すゑも隣村にいるのか？」

「わかんね、本当に何もわかんねんだ」

「くそっ！もういい」

次郎は、まだ多少錯乱気味の兼吉を突き飛ばして、また走り出した。

すゑと出会ったのは隣村の木地師衆と合同で祭りを行ったときであつた。

日に焼けた褐色の肌で少し垢抜けた女子衆と違って、すゑは少し色白で薄幸な印象を与えた。それでいて、きりつとしていて気が強い。さすがは木地師の娘だが、その様は散り際の一輪の華のようにも思えた。木地師の村に生まれながらも、お淑やかで器量がよく、その上美しいとなれば、それは砂利の中にある玉のようである。

次郎は一目見ただけで恋に堕ちた。この時すでに父母を亡くし、独り身であつた次郎は、すゑと出会つたことで元氣を取り戻していった。すゑもまた、そんな次郎と触れあっているうちに相思相愛になつていった。そして二人は、隣村の掟の緩さにも助けられ、ついには婚約約束までしたのである。それがつい一週間前のことであつた。式は一ヶ月後に諏訪神社で行われる手筈になつている。

すゑのことを考えると、いてもたつてもいらなくなり、次郎は走つた。手足がちぎれようと彼は這つても進んだらう。

ようやく隣村の近くにある川にまでたどり着いた。

二又川に差し掛かつた時、激しい音が鳴り響いた。山はうねり、水は轟き、ついには森を飲み込み、水と泥は濁流となりなだれかかつてきた。まるで巨大な竜のように……。

「くそ！憎いあいつめ！今度はすゑまで食つつもりか」

竜が大きく口を開け、次郎の目の前で隣村を飲み込んだ。あつと叫ぶ次郎を後目に竜はどんどん山を降りていく。

次郎は猟銃の湿った縄に火をつけようとともがきながらも、砂の上に狙いを定めた。

「くそつ、くそおー！」

手が震え、うまく狙いがつけられない。それでもひたすら撃ち続ける。

すゑが竜に飲み込まれたことが未だに信じられず、次郎は竜を狙い続けた。

雨は増し、地響きとともに今度は二又川が襲いかかってきた。四方八方に水が溢れ、鉄砲水となって次郎を飲み込む。

（とと、かか。仇とれなかった。すゑ、すまん……）

そこで次郎の意識は途切れた……。

次に次郎が目を覚めたのは翌朝のことだった。

どうやら助かったらしい。しかし、ここは一体何処なのか？

次郎が辺りを見回していると、見覚えのあるものが視界に入った。

「あつ！あれは隣々村の谷口にある御不動尊様じゃねえか」

大規模な山崩れのずり落ちる勢いで、洪水の濁流を押し切つて、奇跡的に竜が降りた位置とは反対の向い側に流されたようだ。

何か音が聞こえた。耳をすまして聞いてみると、音が声であることがわかった。声は近づいてくる。

「おーい」

「？」

「おーい」

程なくして、声が自分に投げかけられていることに気づいて声のほうへと振り向いた。

そこには、隣々村の轆轤師である良造が手を振って立っていた。

「おーい、無事か？」

こちらも手を振り返す。

「ああ、無事だ」

「お？おまえさんは山上村の次郎じゃねえか」

次郎は、良造の側まで駆けていった。

「次郎、無事だったんだな」

「ああ。だが、隣村は……」

心底落胆して、次郎はその場でへたり込んでしまった。

「……。すゑちゃんか」

「……」

「でも、おまえが生きててよかった。命あつてのつてやつだ」

「くそ、くそおー！」

良造は、しばらくそつとしておこうと考え、村に帰ろうとしたが、次郎に呼び止められた。

「どうした？」

「隣村がどうなったか見に行きたい」

「あれは、ひどいなんてもんじゃねえぞ。何もかも竜の腹んだ」

「それでも見たい」

「……ついてきな」

良造は、次郎を伴って谷を登っていく。

「この辺りの谷は全部竜に挟られてんで毎年形が変わってくんた」

「竜……」

しばらく谷を登っていくと、巨大な岩に差し掛かった。三日前までは無かった岩だ。これも竜がもたらしたものであった。

「あちゃー。岩が完全に隣村への道を塞いでるみたいだ」

「……。すまないな、ここがいい」

「そつか……」

良造と別れた後、岩の前に座り込んで目を閉じた。

しばらくして突然目を開いたかと思うと、隣々村の良造のもとまで走りだした。

「どうしたんだ？」

「良造、鑿を貸してくれないか」

「突然何だ」

「俺が助かったのはすゑが守ってくれたからだ。だから俺は、これから一生をかけてあの岩に仏像を彫る。隣村の人々を供養するんだ」

それからは、毎日隣村の前でコーンコーンと音が響いてきたそう  
な。

その音はいつしか、人々が隣村のことを忘れても鳴り止まなかつ  
たという。

音がいつ止んだかははっきりしていないが、そのときにはすでに  
数体の地蔵が並んでいたそう。

中でも真ん中の二体の地蔵は仲睦まじく連れ添っているように見  
え、裏にすゑ、次郎と彫られていた。この二体の地蔵は夫婦地蔵と  
呼ばれ、今でも前の道を通る度に子供達は花を添えていくのである。

以来、隣村へ続く谷の名を竜拔道、隣村跡に立っている石仏群を  
御隣地蔵（音鳴地蔵）と呼んだそう。

## （後書き）

この小説はフィクションですが、一部実話に基づいたお話でもあります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3533e/>

---

御隣地蔵の由来

2010年10月8日15時07分発行